

1. シラバス事例

■事例1 「生活科学概論」

開講対象	生活科学部食物栄養学科		
履修	1年2単位 入門・概論科目群 2科目中でいずれか一方選択必修		
目的	食物科学専攻の新生に本専攻での4年間の学びの内容を紹介するとともに、興味を持って自主的に大学で学ぶ姿勢を養う（前半6回）。生活全般における人と環境との関わりを生活科学的視点から概説し、家庭生活が人間生活に果たす役割について、とりわけ食物科学、食生活面から多面的に考察する（後半8回）。		
計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 食物科学専攻における学び。本学の歴史と理念。 2. 食物科学専攻における学び。健やかな学生生活の過ごし方。 3. 食物科学専攻における学び。情報処理とレポートの書き方。 4. 食物科学専攻における学び。4年間の勉学について。 5. 食物科学専攻における学び。本学の調理学。 6. 食物科学専攻における学び。免許と資格。 7. 食物科学への関心と学問的展開 8. 生活科学とは 9. 生活科学と家政学 10. 海外における動向 11. 家庭の機能・家庭生活 12. 生活科学の社会的展開 13. 再び 食物科学への関心と学問的展開①（専攻における学びと生活科学） 14. 再び 食物科学への関心と学問的展開②（専攻における学びと生活科学） 		

■事例2 「生活デザイン概論」

開講対象	生活科学科ライフプロデュース専攻（短期大学）		
履修	1年2単位 必修（60分*23コマ）		
目的	将来的視野に立ってよりよく生活するために必要なものを追求、考案し、企画・開発していくために、まずは自分の日々の生活の今をみつめ、日常を実感する対象として積み重ねる生活者姿勢を習得する。		
計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 私の生活設計 2～4. 自分の生活を見つめる その1 その2 生活デザイン考① 5～7. 家族ということ その1 その2 生活デザイン考② 8～10. 高齢社会ということ その1 その2 生活デザイン考③ 11～13. 共生ということ その1 その2 生活デザイン考④ 14～16. 食べるということ その1 その2 生活デザイン考⑤ 17～19. 住まうということ その1 その2 生活デザイン考⑥ 20～22. 私の生活設計 をいま一度 23 到達度確認 		
テキスト	『家政学のじかん』関西家政学原論研究会		

2. 授業の特徴や授業を行うにあたっての工夫

工夫① 専門への興味から、家政学への気づきへと展開 (事例1)

「食」のスペシャリストを養成しており、食品学・調理学・栄養学の3分野に関する基礎から応用まで多くの科目が開講されている中で、専門における大学での学びのリテラシーとして位置づけられています。食物科学への関心(進路)がどこにあったのかを掘り起こすことから始めています。

7. 食物科学への関心と学問的展開(食物科学専攻への進学理由 関心事 卒業後)

そして、「一度食物科学から離れてみましょう」と、生活を多面的に捉える中で食への視点を広げ、家政学(生活科学)へと導いています。

14. 再び 食物科学への関心と学問的展開①②(専攻における学びと生活科学)

(食物科学からの興味 自身の食生活の見直し 食育と学問的展開の拡がり)

当該大学では、食物に関心を持つ場合、家庭生活での充実した食生活基盤に支えられていることが多いです。様々な生活、食生活が整っていない場合が社会には存在していること、食生活が変容していること、食の多面性を知らせる機会の必要性を感じます。

工夫② 「家政学とは」から始めると、最初につまずいてしまいます。(事例2)

専門的な興味が分散している(ファッション・ビューティ・インテリア)学生を対象にした専攻必修科目です。専攻目標が、「日々の生活実感を持ちながら、専門の知識と技能に裏打ちされた創造力を働かせて、自分が欲しいもの、よりよく生活するために必要なものを追求、考案し、企画・開発できるプロシューマの養成」ですが、生活に関心を持っているとはいえません。「自分自身の生活設計に、専門性がどのように関わるのか」から始め、特定の専門への傾倒は極力回避します。その後、生活がどのように変容しているのか、データを用い解説します。将来に思い描く生活と現実とのズレに、腹立たしさを感じる学生もあるようですが、客観視するためには、重要な情報です。

工夫③ テキストとその活用、「家政学っていう学問は、実は、・・・」は最後に。(事例2)

読む→考える→伝える(まとめる)→再度考える(「家政学とは」→実践 これらを通して、生活の変容に関する知識・情報は実生活に照らし合わされ、課題が具体的に意識されるようです。

具体的には、最後の数回を費やし、テキストを読破します。1章毎に、「同意点・批判点・疑問点」を抜き出します。時にはディベートを取り入れ、自身の考えを見つめる機会とします。

テキストが、問いかけを多用した読みもの本であることが功を奏し、多くの気づきがあるようです。家政学についての学問的解説は、レポート提出日、講義最終日です。

～レポートを紹介します～

全体を読み終えてはじめて、家政学はもっと多くの学生が学ぶべき学科だと思った。それも学ぶ時期が若ければいいほど、自分の人生設計に役立つのではないだろうか。この教科書には家族、親子関係、制度、加齢、住まいなど全部で7章のまとまりで書かれている。これらすべて「生活するということ」には欠かせないことであり、学ぶ人の年齢や性別を問わず、すべての人々に必要なことだ。特に加齢は、誰も避けられないことである。(中略)現在、私はインテリアの勉強をしている。しかし、ものの設計や配置には非常に興味があるが、生活そのものについて全く関心を抱かなかった。今回、人の生活こそがインテリアに関わる大部分だということに気づくことができた。これからの勉強に役立てたい。